様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2013
課題番号：２１５２０４１１

研究課題名（和文）韻律ラベリングのデータベース化のための曲線音調表示された韻律階層の日印対照

研究課題名（英文）A contrastive study of tonal demarcation of prosodic boundaries in Japanese and Indian dialects : a provisional accumulation of prosodic labeling data

研究代表者
児玉　望（KODAMA, NOZOMI）

熊本大学・文学部・教授

研究者番号：６０２２５４５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,100,000円、（間接経費）　930,000円

研究成果の概要（和文）：九州の諸方言やインドの諸言語においては、語や文節などのまとまりが境界付近のピッチ変化によって示される仕組みをもつものが多い。これを境界特徴と呼ぶ。自発談話音声録音資料の分析を通じて方言ごとの境界特徴を分析した。九州諸方言に関しては、平安朝期以前の段階からの通時的変化として分布を説明することもできることが明らかになった。これは、九州諸方言が、本州方言のような位置アクセントを失ったのではなく、本来祖語のもっていった語声調的特徴のみを維持して位置アクセントを獲得しなかった、という可能性を示唆している。

研究成果の概要（英文）：Spontaneous speech corpora of Kyushu dialects of Japanese and of coastal dialects of a few Indian languages are analysed with a special focus on the tonal markers of prosodic boundaries. Prosodic systems of these dialects can be broadly termed as word tones in which tonal melodies, or a single melody, realize on a span of syllable sequence without a fixed accentual locus specified on the segment tier.
Reconstruction of prosodic changes through comparative method has been attempted for Kyushu dialects, which are shown to have retained the presumably original nature of proto-Japanese as word tones, without acquring the pitch accent as attested in later Honshu dialects of Japanese.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：音韻論　韻律音韻論　二型アクセント　無アクセント

１．研究開始当初の背景

方言アクセント研究は、日本語言語学・日本語音韻論において長い研究史をもつ領域であるが、日本語音韻史との関連で、弁別体系の分析や体系変化の分析に関心が偏り、弁別とに劣らず重要なアクセントの機能である韻律構造の統合機能については理解が遅れており、また、統合機能のみをもつ「型の区別のないアクセント」に関してはほとんど研究がない状態が続いてきた。

「語」より上位の構造階層を想定する韻律構造論は、特に、自発談話音声コーパスが充実しはじめ、これに対する韻律ラベリング付与を目的とした分析が必要とされるといった実用上の目的もあり、近年理論化が進みつつある分野である。アクセントに関しても、単独の語形での実現形だけでなく、発話の流れの中でどのような異音的変異をみせるか（あるいは一貫して維持される特徴は何か）、あるいは、語の弁別とは関わらないイントネーション的特徴とどのように相関するかといった問題が着目される。

２．研究の目的

日本語方言アクセントの中には、ピッチが語の境界や句の境界といった、構造境界の表示に関わっているとみられる現象が多い。一方で、東京方言の名詞無核型（例：「スモモも桃も」）のように、境界にピッチ変化の契機をもっていてはいけないという特徴をもつような韻律タイプもある。九州諸方言では、アクセントの型の区別のない方言も含め、文節境界や語境界で、ピッチによる境界表示が観察されたり、あるいはその境界表示を削除することにより何らかのイントネーション的効果を達成したりする方言が多い。

このような、ピッチによる境界表示の分布にどのような共通点と変異があるかを明らかにするために、諸方言の自発談話資料を分析して対照することにより、ピッチを用いて表わすことのできる韻律構造やイントネーション的効果を集積し、データベース化することを目的とする。

九州方言で観察される韻律構造が一般言語学的な妥当性を確保できるかどうかを確認するために、九州のいわゆる一型アクセントと同様に、発話中での語境界の表示にピッチ変化が関わっていることが観察される、南インド諸言語の自発談話音声資料においても、同様の方法で分析ができることを確認する。

３．研究の方法

デジタル化された自発談話音声資料を、特に語境界・文節境界や句の境界でのピッチ変化に着目して観察し、分析する作業を中心とする。

できるだけ多くの方言を分析するために、既に公開されている自発談話音声資料も積極的に利用し、必要があれば現地調査を実施し、さらに自発談話資料を録音して分析する、という方法をとった。

対象とした方言のうち、南九州の二型アクセントに関しては、鹿児島県立図書館方言ライブラリで公開されている、昭和40年代から昭和50年代の録音を中心に分析した。アクセントの型の区別のないものを含む九州他地域の方言については、日本放送協会が昭和 20 年代から昭和 40 年代にかけて収集した『全国方言資料』の九州および周辺島嶼部の方言について分析した。

インドの諸言語については、テルグ語の東海岸方言のうち、東ゴーダワリ方言とヴィシャーカパトナム方言、カンナダ語の西海岸方言のうち、マンガロール方言および同地域のトゥル語について、複合数詞を中心とする語形調査と読み上げ調査を実施したほか、談話音声資料を収集した。

４．研究成果

(1) 当初の計画で視野に入れていたのは、方言ごとの共時的な分析のみである。しかし、九州諸方言の談話資料を境界特徴に注目して比較すると、「無アクセント」の場合を含め、東京方言の名詞無核型のような文節境界表示をしない型をもつかどうかによって、大きく二つに分かれることが明らかになった。南九州の二型アクセント方言はほぼすべて、このうちの、いずれの型も文節境界を表示し、東京方言の無核型のような境界表示できない型をもたないタイプに含まれる。同じ二型アクセントとされる長崎県南島原市のアクセント体系では、文節境界を明示せずに次の文節へと平進する型をもっており、この点で大きく異なる。このような違いの発生の通時的な分析も重要な問題であると考え、通時的な解釈を視野に、最終年度においては沖縄本島北部の山原方言まで調査対象を拡大し、九州方言でも、南九州の種子島・屋久島や対馬方言のように、本土方言の経た音韻変化を経ていない可能性のある方言を重点的に調査した。

(2) このような違いを通時的に説明するために、日本祖語アクセントが、語境界を表示する型と表示しない型の区別をもっており、いわゆる外輪方言においてはこの区別を失った、という仮説をたてた。この区別の喪失に際し、語境界を表示する側に統合

したか、表示しない側に統合したか、という観点から、九州諸方言（および琉球諸方言）を二分することができることに注目し、日本祖語（平安期京都アクセントに先行する時代）から九州諸方言へのアクセント分化を、いくつかの変化の波及として説明する再建仮説を立てて、学会誌に投稿した。（現在も査読中）

(3)　平安期京都アクセントからうかがわれるのは、この時代の京都アクセントにおいては、語末側の下降（の有無）、「式」として知られる語頭側の下降（の有無）が重要であり、現在の（無核型を除く）東京アクセントのような「核」の位置対立は、それ以降に発達した、とする川上蓁氏の興味深い説がある。この点に着目して現在の九州諸方言の談話資料に目を向けると、九州諸方言において目立つのは、語末側あるいは語頭側の特徴あるピッチであり、ピッチが境界表示に密接に関わっていることが明らかである。とすれば、二型アクセントや一型アクセントのような、九州諸方言に特徴的な、いわゆる語声調体系は、「アクセント（の位置対立）」を失った体系とみるのではなく、むしろ、位置アクセントを獲得せず、（連文節に被さる）声調（メロディー）と、境界部のピッチ表示から成っていたと仮定できる祖語段階から、アクセントを獲得できなかった諸体系である、ともみることができる。

(4)　九州諸方言に共通してみられる境界特徴が、いわゆる「語末核」のような位置固定のアクセントと決定的に異なるのは、境界表示（と型の弁別）が維持できる限りにおいて、自由変異的なピッチ形の揺れがあり、ピッチ上の卓立点が境界周辺の音節で浮動する、という点である。この種の現象は、分析した多くの方言で観察される。南薩方言、種子島方言。屋久島方言など、アクセント解釈が異なる複数の先行研究がある方言がこの地域には多いが、「位置アクセントではない方言を位置アクセントとして解釈しようとした」ことが最大の問題ではないか、と考える。また、この地域の多くのアクセント体系で重要である「境界特徴」については、談話資料を用いることにより知見を深めることができた。

(5)　個別の方言のうち、南九州の二型アクセントで特徴的な型は、鹿児島県の西側に多く分布する。ただし、種子島・屋久島方言を除けば、型の弁別は語末側の境界特徴の違いのみで維持されており、語頭側は、西長島方言で高平調、北薩方言で上昇調、鹿児島県本土主流方言で低平調、南薩方言・甑島方言で語頭隆起によるとみられる重起伏と、型の弁別には関与しない特徴となっている。

(6)　屋久島方言と種子島方言では、語頭隆起を起こす型が、屋久島でA型、種子島でB型と逆になっている。語頭隆起のない種子島のA型（語頭が低い高平調）と屋久島のB型（低平調）が南九州の二型アクセントの祖形であろうと考える。種子島方言の特徴は、B型の語末側の境界で、次文節に向けて上昇する、という点である。先行研究において種子島方言で型の区別が曖昧とされているのは、連文節データで一貫して観察することができるこの境界特徴を見過ごしているためであると考える。なお、B型語末の上昇境界声調は、甑島方言や、南薩方言でも観察することができる。

(7)　対馬アクセントや、博多方言など筑前式アクセントは、「平板型を欠く東京式アクセント」とされることがあるが、いずれもピッチによる語末境界表示をもっている、という点で一型アクセントや南九州の二型アクセントと共通する特徴をもっている。このうち、現地調査を含めて談話資料を分析した対馬鰐浦方言は、3音節以上でも型の区別が二つより増えない語声調的な体系である。型の統合の点からはいわゆる二型アクセント共通の革新を経ているとみなすことはできない。対馬と南九州でそれぞれ別個に革新を続けながら、語声調的性格を維持した、とみなせば、日本祖語が本来語声調的な体系であったとする仮説によく合致する。対馬アクセントは、1音節語や複合語・連文節で型の弁別を失うことが多いが、語境界や複合語境界など境界のピッチ表示はよく維持されている。

(8)　名護方言は、今回の調査の対象方言ではないが、通時的問題の解決のために今後琉球方言まで対象を拡大する必要があることに留意し、予備調査的な談話資料分析を行なった。いわゆる高起類の下降・非下降の揺れについては対馬方言と同様な、位置アクセント的でない揺れが観察された。また、琉球方言では本土諸方言に対して独自の語類に分割される低起類が、この方言では「低起」で現れるが、連文節の観察から、一貫して語頭に境界ピッチ下降があることが観察された。可能性としては、琉球諸方言の三型・二型の語声調体

系も、南九州同様に、境界声調の維持／改変と、語頭隆起によって説明できるのではないかと考えている。

(9)　インド諸言語の場合、日本語のような通時的な説明はできないのであるが、ピッチによる境界表示（語頭部の「低」）が語境界に現れ、この「低」からの上昇が「句」の特徴である、とみなすことのできる方言が多い。日本語と比べると韻律特徴の方言差が小さいが、非弁別的な語頭部のピッチ曲線について、語頭隆起的な段差が地域的な特徴として現れる地域があるなど、類型的には興味深い現象がみられる。インド諸言語については、現地での談話資料研究として、IIIT（インド情報技術研究所）の音声コーパスプロジェクトで意見交換をし、語末イントネーションのような比較的狭い範囲での分析が行なわれていることを知った。韻律構造全体の解明に向けて協力していきたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　７件）

① 児玉望　名護方言の二つの音声資料の韻律分析、熊本大学言語学論集、査読無、Vol.13、2014、pp.21-56
http://hdl.handle.net/2298/29909

② 児玉望　対馬鰐浦アクセント体系のピッチ可変性について、熊本大学言語学論集、査読無、Vol.13、2014、pp.57-68
http://hdl.handle.net/2298/29910

③ 児玉望　種子島二型アクセントの境界特徴－自発談話音声資料の分析、熊本大学言語学論集、査読無、Vol.12、2013、pp.31-50
http://hdl.handle.net/2298/29902

④ 児玉望　屋久島の二型アクセント－自発談話音声資料の分析、音声研究、査読有、Vol.16 No.1、2012、pp119-133
http://ci.nii.ac.jp/naid/110009479343

⑤ 児玉望　甑島の二型アクセント－自発談話音声資料の分析、熊本大学言語学論集、査読無、Vol.11、2012、pp.47-68
http://hdl.handle.net/2298/29882

⑥ 児玉望　日本語諸方言の韻律境界と領域、熊本大学言語学論集、査読無、Vol.10、2011、pp.1-26
http://hdl.handle.net/2298/24082

⑦ 児玉望　方言音声コーパスの韻律構造表示～鹿児島県立図書館方言採録テープの分析～、熊本大学言語学論集、査読無、Vol.9、2010、pp.1-28
http://hdl.handle.net/2298/24081

〔学会発表〕（計　２件）

① 児玉望　「語声調類型の手がかりとしての九州アクセント実現形の揺れ」日本音声学会第 327 回研究例会シンポジウム「語声調の音声的実現における異音的変異としての声調変位」2013.6.22.　国立国語研究所

② KODAMA Nozomi, Tonal Demarcation of the Phonological Phrase in Telugu. at All-India Conference of Linguists 32. University of Hyderabad 2009.12.16.

〔図書〕（計　１件）

① 児玉望　付属語のアクセント－鹿児島方言、日本語研究の 12 章（上野善道監修、明治書院）、2010、pp475-489

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
児玉　望　　（KODAMA, Nozomi）
熊本大学・文学部・教授

研究者番号：６０２２５４５６

(2)研究分担者

(3)連携研究者